

シンポジウム 「これまでとこれからの消化器内視鏡技師研究」

S-1 過去5年間の北海道消化器内視鏡技師会における研究発表の傾向と動向

J A北海道厚生連 倶知安厚生病院 土田 徹

目的

北海道消化器内視鏡技師会は現在 850 名の会員で構成され、看護師が主な会員であるが、臨床工学技士などの会員も増加している。年間事業として、定期総会、トレーニングコース、研究会、集中講義など、毎回多数の参加者で開催している。今回、過去5年間の研究会における研究発表の内容と傾向を考察したので報告する。

方法

2009 年から 2013 年の 5 年間、北海道消化器内視鏡技師研究会で発表され、要旨・抄録が入手できた 45 演題について内容の分類と分析。分類については、平成 20 年富山内視鏡看護研究「日本消化器技師研究会における研究発表の傾向と動向」の内視鏡看護分類コードを参考に分類。

結果

内視鏡看護分類コードの内訳は、直接看護 9 題、間接看護 11 題、診療補助・専門的看護 12 題、管理 5 題、その他 8 題であった。中分類の内訳は、直接看護は、「教育・オリエンテーション」、「体位変換・移乗・移動」、間接看護は、「設備・機器の保守・点検」、「連絡・報告・情報収集」、「洗浄・消毒」、診療補助・専門的看護は、「前処置」、「検査介助（非侵襲性）」、「検査・治療介助（侵襲性）」、「治療・処置（呼吸循環器系）」、管理は、「研修・指導・研究」、「感染管理」、「薬品・物品管理」の順に多かった。

考察

過去5年間の研究発表を、内視鏡看護分類コードで分類したところ、診療補助・専門的看護、間接看護、直接看護、管理の順番で演題が多く、中でも診療補助・専門的看護では「前処置」、間接看護では「設備・機器の保守・点検」、直接看護では「教育・オリエンテーション」が多く、どの年度でも上位を占めている。これらは、内視鏡業務を行う上で基本的な項目であり、現場に即したものである。今後も同様の順位で継続されると推測される。

S-2 過去5年間の東北支部の研究の内容と傾向

秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻
臨床看護学講座 宗村暢子

はじめに

東北支部は東北6県で構成されており、毎年各県で技師研究会が開催されている。今回東北支部の過去5年間における研究の内容と傾向を明らかにし、今後の課題を考察したため報告する。

研究方法

1) 対象

2008年～2012年版日本消化器内視鏡技師会紀要に掲載されている東北6県の技師研究会で発表された研究

2) 分析方法

- ①要旨・抄録を入手できた研究は、内容を読み内視鏡看護業務分類コードに分類する。
- ②要旨・抄録を入手できなかった研究は、タイトルから項目に近いものを選択し、分類する。
- ③要旨・抄録を入手できた研究は、研究方法、研究内容を分析する。

3) 倫理的配慮

意図的な対象の排除を行わない。研究内容を誇大に解釈しない。

結果

5年間で発表された研究は122題であり、その内要旨・抄録を入手できた研究は42題であった。

内視鏡看護業務分類コード大分類での内訳は、直接看護18題、間接看護31題、診療補助・専門的看護54題、管理15題、その他4題であった。

中分類の内訳は、直接看護は、「教育・オリエンテーション」、間接看護は、「洗浄・消毒」、診療補助・専門的看護は、「前処置」、管理は、「研修・指導・研究」に関する研究が多かった(図1)。

5年間の研究発表数は、2008年28題、2009年30題、2010年25題、2011年20題、2012年19題であった(図2)。

研究の内容や方法は、マニュアル作成など自施設での「取り組み発表」、炭酸ガス使用による効果を検証するためなどの「準-実験研究」、内視鏡介助者のタッチなどに関する「調査研究」などがあつた。

要旨・抄録の記載内容は、対象の記載なし12題、倫理的配慮の記載なし38題、考察なし8題、引用文献・参考文献の記載なしが37題であった。

考察

内視鏡看護業務分類コード大分類での内訳の割合は、安東ら¹⁾とほぼ同様の結果であった。診療補助・専門的看護に関する研究発表が各年度で多かったことや、中分類の内訳で「前処置」「洗浄・消毒」に関する研究発表が多かったことから、東北支部においても内視鏡業務の実践に即したものをテーマとしていた。

内視鏡検査・治療に関する新製品の発売や新たなトピックスが発表されるとそれに関する研究発表が多くなっている傾向が見られた。内視鏡に関する最新の情報を敏感にキャッチし、患者がより安全で安楽に検査・治療を受けられるよう、その効果や取り組み状況を研究発表しているのではないかと推測される。

準-実験研究や統計処理を行っている研究が見られるようになってきていた。これは、エビデンスのあるケアについて関心が高まってきた結果ではないかと考える。今後、連絡・調整等は難しいと思うが、異なる施設間や技師会支部間での共同研究として大規模な調査を行うことで、より信頼度の高い結果を得ることができるのではないかと考える。

また、年々発表数の減少傾向がみられた。各支部での研究会には、他施設への情報提供という目的もあると思われる。研究会という名目に気負わず、積極的な発表が望まれる。

抄録・要旨集への記載では、基本的な事項が書かれていないものがみられた。抄録等へは研究内容を簡潔明瞭に書く必要がある。技師学会の演題申し込みのように、支部の研究会においても記載内容の規定等を作成するのがよいと考える。

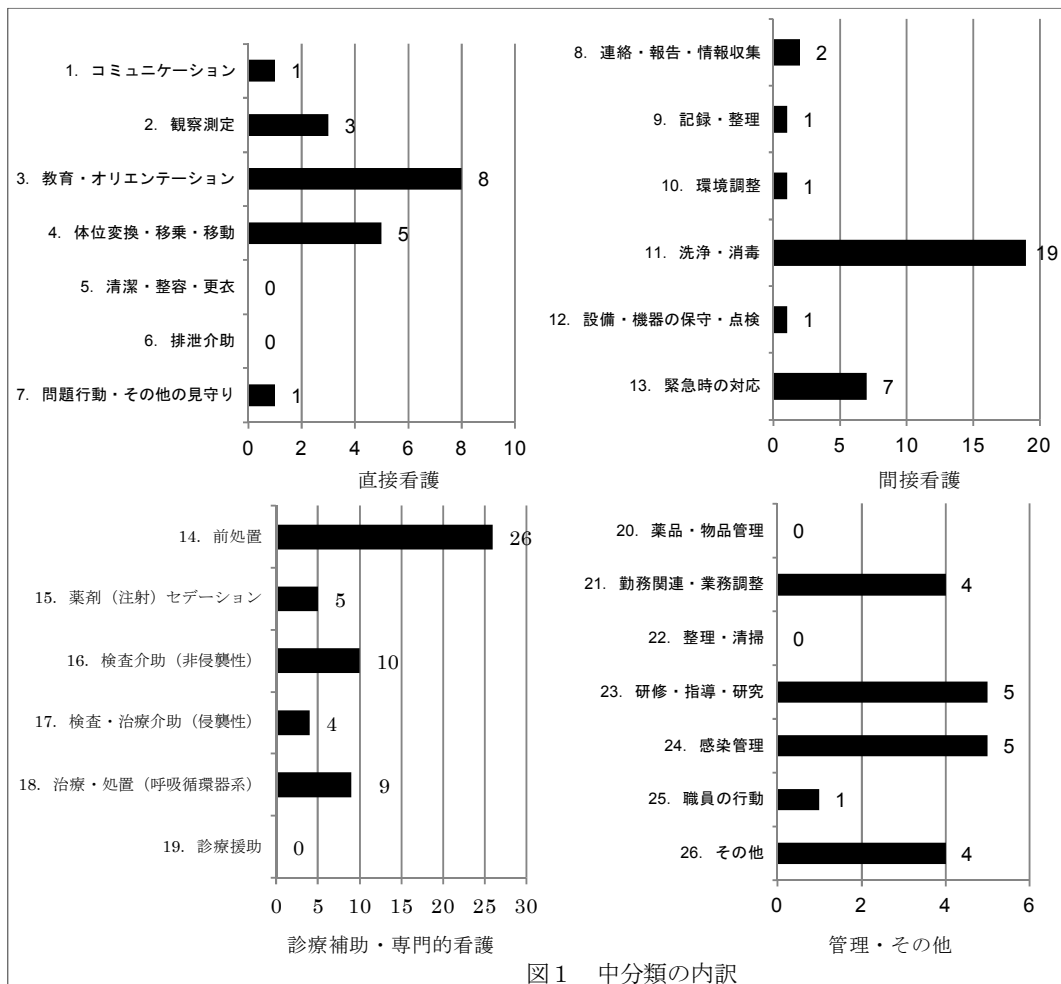


図1 中分類の内訳

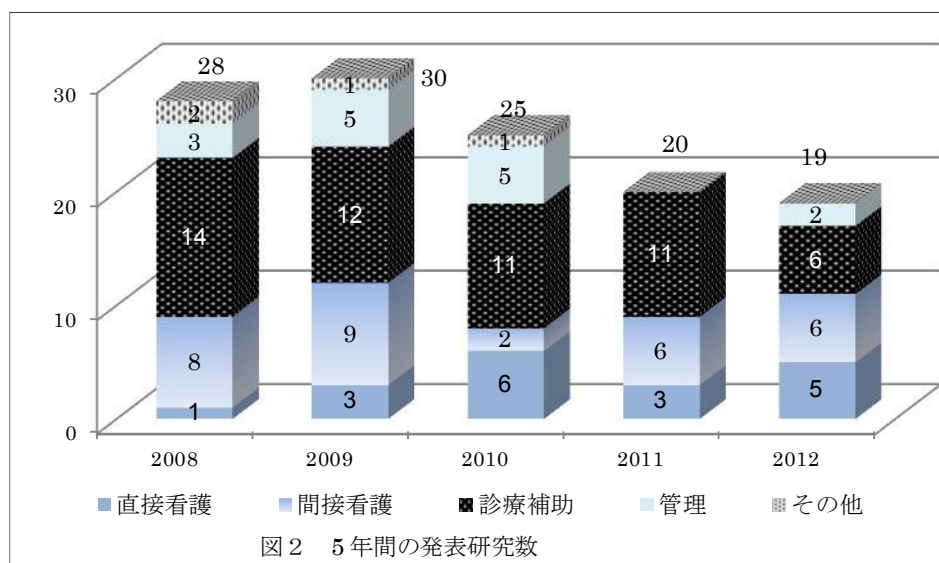


図2 5年間の発表研究数

結論

1. 内視鏡業務の実践に即したものをテーマとし、研究に取り組んでいた。
2. 新製品や新たなトピックスが発表されるとそれに関する研究発表が多くなっていた。
3. 統計処理を行う研究が増えてきていた。
4. 年々、発表研究数の減少が見られた。

引用・参考文献

- 1) 安東則子ほか: 日本消化器内視鏡技師研究会における研究発表の傾向と動向, 日本消化器内視鏡技師会会報, 39, 121-123, 2007.

連絡先: 〒010-8543 秋田県秋田市本道 1-1-1

TEL/FAX: 018-884-6551

S-3 関東地区消化器内視鏡技師研究会における研究発表の傾向と動向

関東消化器内視鏡技師会 岡田修一

はじめに

関東支部は、関東消化器内視鏡技師会主催と一都六県のうち群馬県を除く一都五県で年に1回研究会が開催されている。

目的・対象

関東支部における過去5年間の研究会内容と動向を考察する。2008年から2012年までの5年間に関東地区の技師会研究会で発表された研究を対象とする。

方法

1. 関東技師会主催研究会で発表された研究は、技師会開放に掲載された抄録の研究内容から内視鏡看護業務分類コードに分類し、研究内容を分析する。
2. 一都五県で発表されたものは抄録またはタイトルから、項目に近いものを選択し分類する。

結果

内視鏡看護業務分類コード大分類での内訳は、総数228題で直接介助28演題(12.3%)、間接介助75演題(32.9%)、診療補助・専門的看護71演題(31.2%)、管理49演題(21.4%)その他5演題(2.2%)であった(表1)。

間接介助、診療補助・専門的看護ほぼ同じ割合あり、管理、直接介助の順に多く、毎年報告されている。間接介助の中では洗浄・消毒、機器の保守・点検に関する順で、診療補助・専門的看護では、前処置、薬剤、検査介助に関する順で毎年報告されている。また管理では、業務調査、研修・指導の優に多かった。直接介助では、教育・オリエンテーションに関するものが多く毎年研究報告がされている(表2)。

中分類の内訳では、直接介助で「教育・オリエンテーション」が一番多く「観察・測定」「コミュニケーション」「体位変換・整容・更衣」がほぼ同数であった(表3)。間接介助は、「洗浄・消毒」が圧倒的に多く次いで「連絡・報告・情報集」、「設備・機器の保守・点検」「記録・整理」がほぼ同数であった(表4)。診療補助・専門的看護は、「前処置」が多く「検査介助(非侵襲性)」「検査・治療介助(侵襲性)」「薬剤(注射)セデーション」がほぼ同数であった(表5)。次いで診療援助があった。管理では「勤務関連・業務調整」「研修・指導・研究」の順であった(表6)。総じて分類コードによる内訳の結果は、安東¹⁾らの報告とほぼ同様の結果であった。

考察

今後の動向は、毎年報告されている傾向が続くと思われる。医療安全に関してのアセスメントや大腸カプセル内視鏡の認可に伴い、前処置に関する研究や検査介助などの診療補助・専門的看護が多くなると予想される。

結語

内容を把握するうえですべての研究を実際に聴講したわけではなく、抄録を拝見する以外判断する手段はなかったが研究とする内容であったか疑問とするものが多いように感じた。いわゆる研究とするためには「目的」「方法」「結果」「考察」「結論」が的確に纏めている必要がある。形式的に記載されていても内容的に不備なものが多い。研究目的する場合、先行研究はあったのかまたはどうであったのか、倫理的配慮はどうか、研究とするための方法手段やデータ数は正しいかどうかなどの疑問が残る。今後は、根拠を基にした、またはその研究が根拠となり指標となるような研究報告がされることを期待したい。今後、一層そのための取り組みを考えていく必要がある。

引用・参考文献：

- 1) 安東則子ほか：日本消化器内視鏡技師研究会における研究発表の傾向と動向, 日本消化器内視鏡技師会報, 39, 121-123, 2007

5年間（2008年～2012年）228演題

分類	演題数
直接介助	28 (12.3%)
間接介助	75 (32.9%)
診療補助・専門的看護	71 (31.2%)
管理	49 (21.4%)
その他・特記事項	5 (2.2%)

大分類(多い順)	中分類 (毎年報告)
1. 間接介助 (32.9%)	-洗浄・消毒>機器の保守・点検
2. 診療補助・専門的看護 (31.2%)	-前処置>薬剤>検査介助
3. 管理 (21.4%)	-業務調査>研修・指導
4. 直接介助 (12.3%)	-教育・オリエンテーション
5. その他 (2.2%)	-海外施設の紹介,JCI

図1：結果1 研究会発表内訳

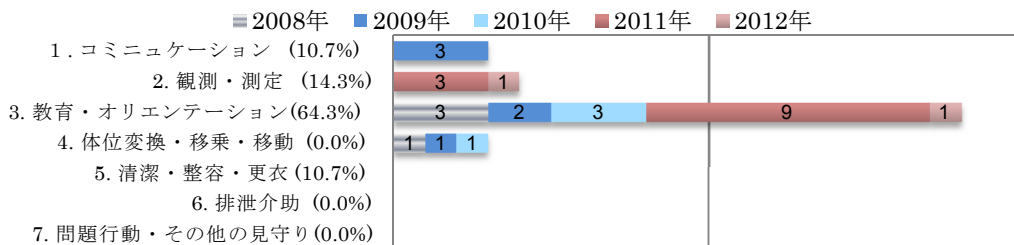


図3 直接介助 (28演題 12.3%)

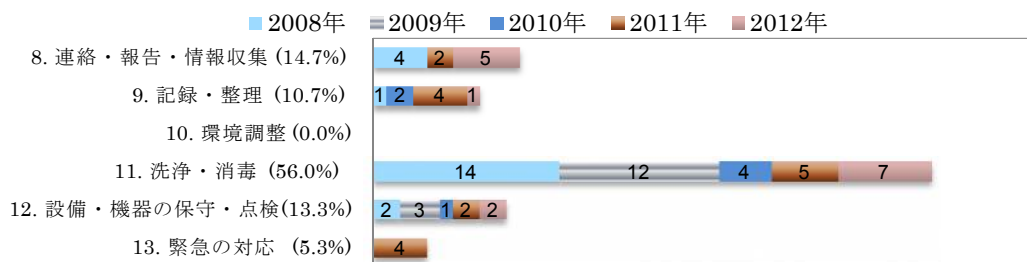


図4 間接介助 (75演題 32.9%)

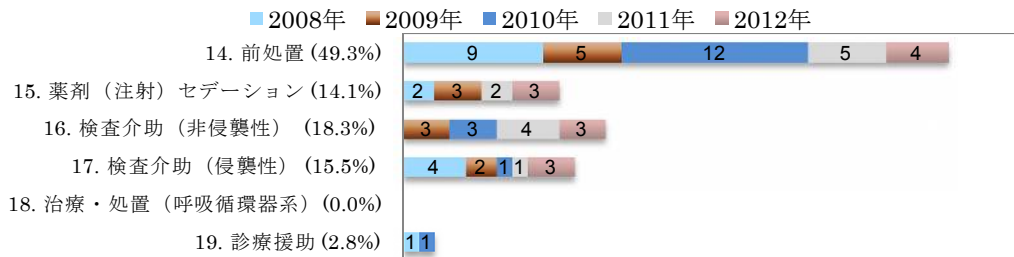


図5 診療補助・専門的看護 (71演題 31.2%)

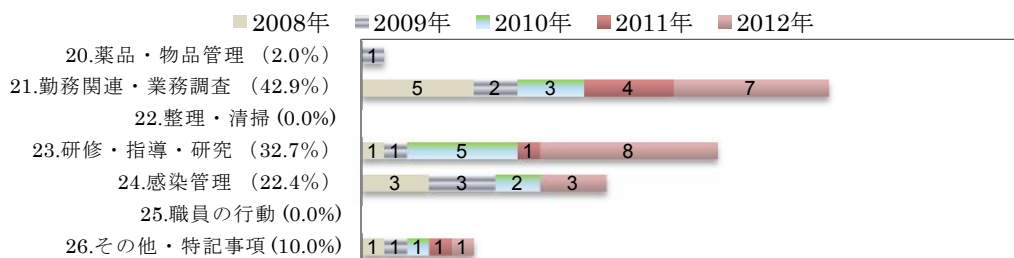
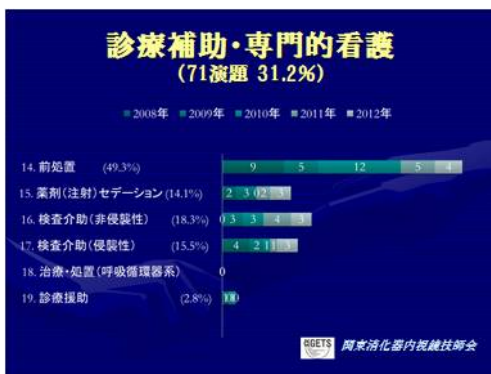


図6 管理 (49演題 21.4%)



S-4 甲信越消化器内視鏡技師研究会における研究発表の傾向と動向

新潟県立中央病院 深川 悟

はじめに

甲信越消化器内視鏡技師会は、長野県、山梨県、新潟県で構成され、各県で年1回の研究会を開催し、甲信越の研究会は持ち回りで年1回開催され、第26回を数える。今回、過去5年間の発表を分類・分析し、その内容と動向をまとめたので、報告する。

方法

対象：2007年から2013年の甲信越消化器内視鏡技師研究会での研究発表。

方法：甲信越消化器内視鏡技師研究会の研究発表の内容に応じて内視鏡看護業務分類コード・大分類4項目、中分類26項目に分類し、年順に研究傾向と動向を分析した。さらに内視鏡看護に関する研究内容について詳細に分析した。

結果および考察

論旨の総数は53題、内視鏡看護業務分類コード大分類での内訳は、直接介助4題(7.5%)、間接介助15題(28.3%)、診療の補助・専門的看護31題(58.4%)、管理3題(5.6%)となった。

中分類の直接介助では(教育・オリエンテーション)が多く、検査オリエンテーションや待ち時間短縮に向けての説明などが、見られた。

間接介助では、(洗浄・消毒)が多く、時代的にも洗浄・消毒履歴管理が進められ、マルチソサエティーガイドラインでも推奨されていった経緯もあった。高水準消毒薬の経時劣化やATP測定なども見られた。ガイドラインを遵守したスコープ・デバイスの洗浄消毒が進められ、より安全・安心できる管理ができるようになったと考える。しかしながら、ガイドラインがあっても各施設での管理が徹底されていない現状もあり、管理者の意見により左右されている施設もある。今後は、経済性も考慮した器具の開発や各施設での標準化された管理を期待する。

診療補助・専門的看護の割合が1番多く占め、(非侵襲性の検査介助)(前処置)(侵襲性の検査介助)(薬剤・セデーション)の順に多く、上部・下部内視鏡検査や経鼻内視鏡時の患者の苦痛の軽減に向けた工夫や前処置が大半をしめ、侵襲性の検査介助ではESDやPEG等の治療内視鏡の調査があった。そして、その治療内視鏡の普及に伴ったセデーションの工夫も多くみられ、苦痛が少なく、安全に手技が遂行できるような試みがされるようになった。そして、カプセル内視鏡やCO₂送気等のより低侵襲の手技の普及は、各施設での研究がより加速させたと思う。

管理では、新人のスキルアップにむけたマニュアルの作成等が見られた。

時代をおってみると、その時代の新しい手技や看護の研究がされており、その研究がそのまま現場に生かされていると思える。そして、進歩し続ける内視鏡医療とともに、内視鏡技師の資格も臨床工学士を始めとするメディカルの方々も取得されるようになり、さらなる多方面からの研究がされるようになるであろう。

エビデンスデータに基づいた高い専門性のある研究が、今後も構築され、さらなる内視鏡分野の進歩に貢献できるような内容の研究の増加を期待する。

結語

スタッフ不足や業務の多忙が原因で、なかなか研究がされない施設も多く聞かれ、毎年の研究会でも発表数が少なくなっている現状もある。しかしながら、研究をすることにより業務改善や患者サービスを期待でき、結果的に施設での安全や看護の質の向上につながると考えられる。今後も、研究する姿勢を忘れずに、1歩進んだ意識をもつことが、課題と考える。

S-5 東海地区に於ける過去5年間の研究内容と傾向

伊勢赤十字病院救命救急センター 内視鏡 出口 京子

目的

東海地区に於ける過去5年間の研究会の研究内容と傾向を考察する。

対象

2009年～2013年に開催された東海4県の技師研究会・懇話会で発表された研究。

方法

- 1.研究内容を読み内視鏡看護業務分類コードに分類し研究方法、研究内容を分析する。
- 2.研究タイトルのみは、項目に近いものを選択し分類する。

結果

5年間で発表された研究の総数は80題であり、その中で抄録を入手できた研究は49題であった。内視鏡看護業務分類コード大分類での内訳は、直接看護12題(15%)、間接看護29題(36.2%)、診療補助・

専門的看護 23 題 (28.7%)、管理 15 題 (18.7%) その他 4 題 (5%) であった。

中分類の内訳は、直接看護は、「教育・オリエンテーション」、「モニタリング」、間接看護は、「緊急時の対応」、「洗浄・消毒」、「機器の点検」診療補助・専門的看護は、「前処置」、「検査・治療介助 (侵襲性)」、管理は、「感染管理」、「薬品・物品管理」の順に多かった。

研究の方法は、量的研究が多く「質問紙調査法」、「準-実験研究」「カテゴリー分類」等であった。

考察

内視鏡看護業務分類コード大分類では、「間接看護」の演題が多く、その中でも実践業務である洗浄・消毒においては、毎年多くの研究発表がなされている。しかし、洗浄評価・濃度管理・履歴管理と内視鏡にとっては基本であるが、なかなか統一できない現状が伺える。また、感染管理の視点から注意を払っていても内視鏡からの感染報告が後を絶たない現実がある。だからこそ洗浄消毒の研究に意義があり継続して患者に確実に安心できる内視鏡機器の提供が叫ばれる。また、内視鏡検査時の緊急対応の研究も多い。これは、内視鏡室での緊急対応に不安・恐怖を感じているスタッフが多いという表れである。内視鏡スタッフにとっては、迅速且つ的確な判断を要求されるため精神面・技術面でのシミュレーション教育が重要となる。このような研修や教育を重ねることにより内視鏡スタッフの救急時の対応技術が向上し精神面への負担軽減に繋がって行くと考え。その結果、より一層患者の安全を図れる内視鏡看護が確立される。

内視鏡看護記録においても自施設での記録監査機構を構築し看護記録の質の保証向上に努めている発表があった。現在は電子カルテが主流になりこのような研究がなされる事により内視鏡看護記録の礎になると考える。次に多かったのは、診療補助・専門的看護である。実践を踏まえた分野であり様々な視点からの発表があった。その中でも前処置に対しては、どの施設でもこれが一番いいと言える前処置を目指し咽頭麻酔の効果、下剤による洗浄効果の比較など準-実験研究が多く看られた。これらの研究によりエビデンスに基づいた前処置がどの施設に置いても実施されていると推測できる。続いて検査・治療の介助は各施設によって異なり、何処まで介助を実践しているのかが、今回の発表演題である「ESD の介助の工夫」「CO₂を使用した検査の介助」「カプセル内視鏡の介助」等の研究発表により知り得る。

直接看護に関しては、患者への検査・治療の説明、指導が大半を占めている。患者が安心して安楽に検査・治療を受けて頂くためには、説明・指導の重要性を認識し患者に寄り添い内視鏡看護を実践していく事が内視鏡看護師の使命であると再認識する。このように過去 5 年間の研究発表を振り返ることにより確実に信頼できる内視鏡看護に前進していると感じる。また、これからの研究展望としては、看護師の減少に加え煩雑な内視鏡業務の中で如何に研究の視点を持ち内視鏡看護の質の向上に努めていくかが今後の課題であり、その 1 つとして研究を分析する内視鏡的な尺度すなわちスケールがあれば異なる施設間や内視鏡技師間、内視鏡スタッフ間での共同研究が実現すると考える。その事は、日本消化器内視鏡技師会を中心として各支部さらには各県へと 1 つの繋がりの中で研究の分析が可能となり内視鏡基準が確立すると考える。

今回のテーマである今後の研究展望が明確になり内視鏡に従事するスタッフ一人一人が同じ方向性を持ち考え意識し認識することで今後の内視鏡看護研究の大きな展望へと繋がって行くと考え。

参考文献

- 1) 安東則子ほか: 日本消化器内視鏡技師研究会における研究発表の傾向と動向, 日本消化器内視鏡技師会会報, 39, 121-123, 2007.

S-6 北陸地区における技師研究の傾向と動向
～2007年から2011年の地方会研究発表より～

富山内視鏡看護研究会

真生会富山病院 ○梅田加洋子
市立砺波総合病院 安東 則子
富山赤十字病院 大橋 達子
済生会富山病院 高木 妙子

はじめに

近年、内視鏡技術の進歩はめざましく内視鏡技師に求められる知識、技術も多岐にわたるものとなっている。内視鏡に従事するスタッフは、日々現場で考え、工夫し安全・安楽・信頼される技術の提供を目指している。北陸消化器内視鏡技師会（以降、北陸技師会）は、福井県、石川県、富山県で構成され、会員数約480名で活動している。毎年11月頃に技師学会地方会を開催し研究発表を行っている。今回、過去5年間に内視鏡技師学会地方会において発表された演題を集積し研究傾向と動向についてまとめ、内視鏡技師研究について考察した。

目的

過去5年間に北陸技師学会で発表された演題を集積し、研究傾向と動向についてまとめ、内視鏡技師研究について考察する。

方法

1. 対象：平成19年から平成23年に北陸技師研究会及び学会の抄録。
2. 方法：演題抄録を内視鏡看護業務分類コード・大分類4項目、内視鏡看護業務分類コード・大分類4項目、中分類26項目を使用し分類した。
3. 倫理的配慮：個人及び施設名が特定されないよう配慮し、研究趣旨、集計結果は研究以外に使用しない。

結果

演題総数26題。内視鏡看護業務分類コード・大分類4項目では、診療援助・専門的看護10題、直接看護（直接介助）9題、管理5題、診療・専門的看護2題であった（図1）。

中分類では、非侵襲的検査介助4題、教育・オリエンテーション3題、感染、研修、設備機器、診療援助が各2題であった（図2）。

年度別に比較すると平成21年以降から、管理に関する発表が増加している（図3）。

研究方法は、準実験研究による比較検討、スタッフ、患者への効果に関するアンケート調査による内容が多く、施設での取り組みを紹介したものもみられた。

考察

北陸では、5年間で演題総数26題と多くない。これは、会員数が480名と少なく、毎年演題募集を行っても数が集まりにくいと考える。また、研究として取り組み、結果を出すには準備期間が必要なため、毎年応募することが難しく、発表数が増加しない一因ではないかと推察する。

内容では、診療援助・専門的看護の侵襲性、非侵襲性検査介助が多く、現場で疑問、必要と感じた事を研究課題としている。日進月歩する内視鏡治療に携わる中、処置具や前処置の方法も変化し、安全な治療、検査を提供する為に創意工夫と専門性が求められている。研究課題は、その年、前年に話題となったことが多く、その検証的研究が多いと推察する。

2009年度より管理に関する項目が増加しており、マルチソサイティガイドラインの改訂によるものと推察する。

まとめ

北陸では、会員数480名と少なく、毎年の演題応募が難しい状況であり、地方会での発表数がなかなか増加しない一因ではないかと推察する。地方会の活動を活発に行うには研究発表の場をできるだけ多く設け、研究の必要性や、研究が現場の改善につながることを周知していくことが大切である。全国学会や看護協会で発表された内容であっても地方での発表に対応して行く必要がある。

また、研究成果を文書化、論文化しエビデンスを示す必要があり、その成果をたくさんの会員に周知できる場が必要である。これにより研究に対する意欲、興味につながると考える。

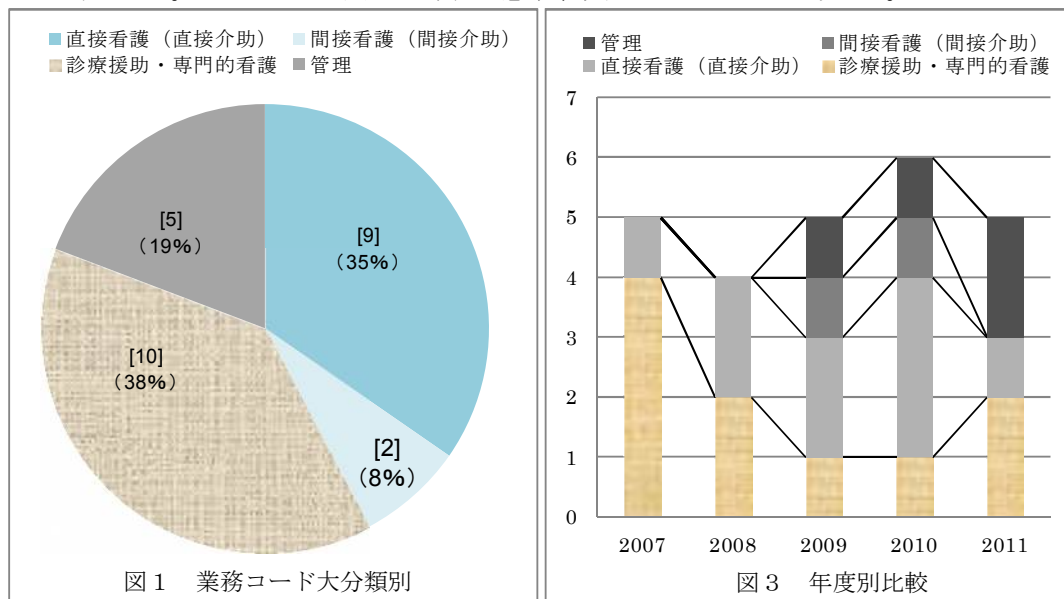


図1 業務コード大分類

図3 年度別比較



図2 業務分類中分類

おわりに

日常の業務での疑問や気づきが研究につながる。それらを解決するために過去の研究成果を探索し、研究を進め研究結果を積極的に発表していくことが大切である。

連絡先：〒939-0243 富山県射水市下若 89-10

真生会富山病院 内視鏡室 梅田加洋子

TEL 0766-52-2156 (代表)

S-7 近畿消化器技師研究会における研究発表の傾向と動向

近畿消化器内視鏡技師会研究班
香東国やましな ○只石 裕子

はじめに

近畿消化器内視鏡技師会は、年2回の開催を実施され現在に至っている。

目的

近畿消化器内視鏡技師会における過去5年間の研究会内容と動向を考察する。

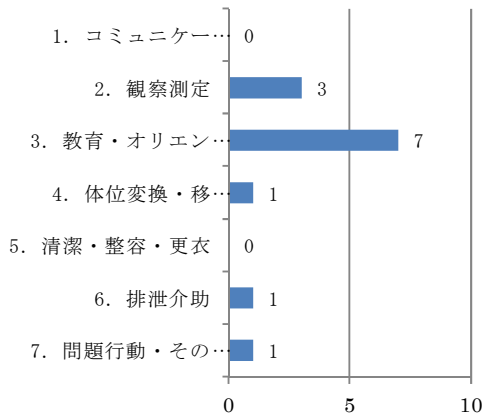
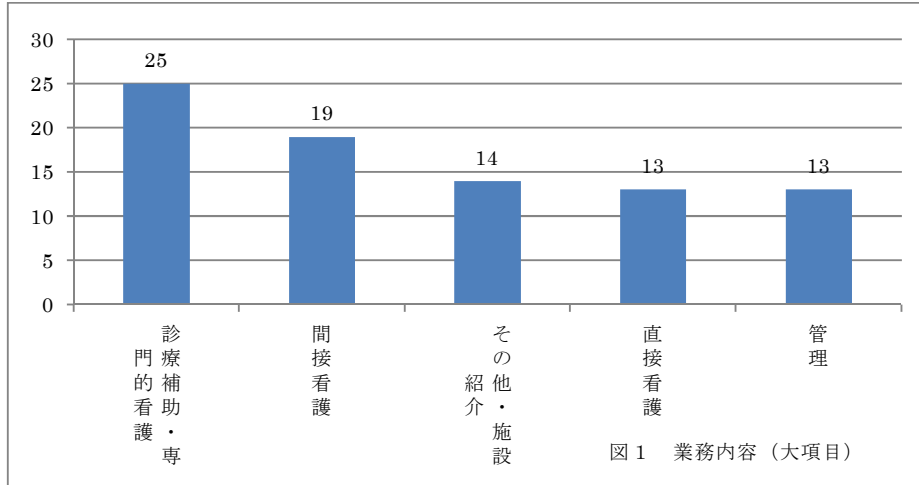


図2 直接看護

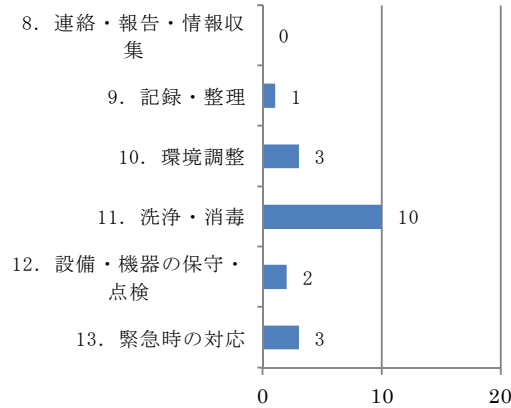


図3 間接看護

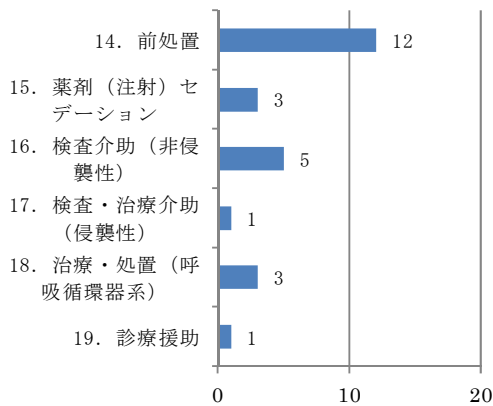


図4 診療補助・専門的ケア

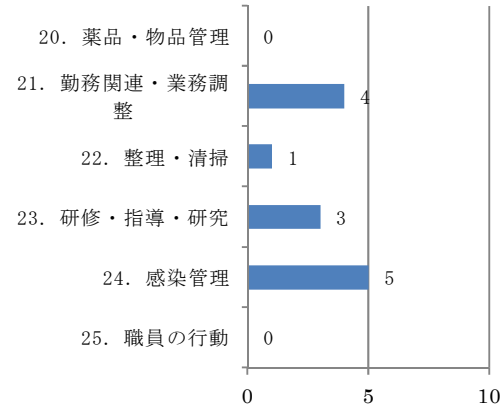


図5 管理

方法

対象：2008年から2012年の近畿消化器内視鏡技師会報。

方法：発表論旨を内視鏡看護業務分類コード・大分類4項目、中分類26項目に分類し、年順に研究傾向と動向と分析を行った。

結果

論旨の総数は84題、内視鏡看護業務分類コード大分類での内訳は図1に示す。中分類の内訳として、直接看護(図2)では、(教育・オリエンテーション)に関するものが一番多く、内容は説明用紙・問診票・マニュアル・チェックリストの改良や見直し、ビデオや写真なども具体的に取り入れられ説明内容に工夫・改良された内容が多い傾向にあった。

間接看護(図3)では、(洗浄・消毒)の論旨数が大半を占めており、洗浄液・消毒液の濃度と安全性、強酸性水・過酢酸など各消毒液の比較、薬液濃度の比較など多様な内容であった。

診療の補助・専門的ケア(図4)では、(前処置)の論旨が多く下部内視鏡検査・治療の前処置における腸洗浄効果を比較検討した論旨、次いで(セデーション)に関するものが多く、鎮痙剤としてペパーミントオイルを導入した効果、侵襲性が高い検査・治療などにおける鎮静剤の安全性や苦痛軽減を評価している実態調査があった。管理(図5)では洗浄作業やスコープの取扱いについての感染管理、PC上管理による業務改善・業務調整、教育・指導においては自施設作成のDVDやマニュアルを用いた教育論旨などが多い傾向だった。

また、5年間で臨床工学技士・検査技師による実験調査・デバイスなどの開発報告の論旨内容も多い傾向にあった。

考察

2008年から2012年からの5年分の論旨内容を調査した結果、内視鏡医療の変遷とともに研究内容はカプセル内視鏡や経鼻内視鏡、ダブルバルーンスコープ、大腸内視鏡検査時の炭酸ガス送気、ビジクリア®製剤による腸管洗浄、ペパーミントによる腸蠕動抑制など事新しい報告内容の論旨が多く、臨床研究の成果として信頼性が高まり、安全性、安心、エビデンスある技術の提供や専門性の高いサービス提供につながっていると考えられる。また、内視鏡看護の質の向上において直接・間接看護研究の発表が数多く期待されるが、論旨数が少なかった。内視鏡における看護サービス提供においては妥当であるかどうか、判断根拠やサービスに至る思考過程が適切でない内視鏡看護の質の低下につながる。看護の質にエビデンスをもつことやバイアスのない看護実践を行うためにも看護研究を実施することは大切であり、直接看護の研究を多く取り込まれていくことに期待する。

また、残念ながら論旨内容には報告発表にとどまり、研究成果として論旨にまで繋げられていないものもありエビデンスのある研究成果として論旨として形にのこしていくことが望まれる。さらに論旨の項目内容に偏りがあったことや倫理的配慮の記載、検定の種類、有意差の表示、症例数(対象数)などが明記されていないものも多く、発表論旨の査読方法や課題演題の選定においても今後の課題と考える。

結語

年代とともに内視鏡医療を取り巻く環境の発展にともない、時代が求めるニーズ、内視鏡看護の専門化、技術提供の方法論や高度化につながる研究が活発に取り組みされてきている。科学的根拠かおる論旨も多く、研究成果としてさらなる内視鏡看護サービスの提供・向上に繋げていくことに期待する。

参考・引用文献

- 1) 安東則子ほか：日本消化器内視鏡技師研究会における研究発表の傾向と動向，日本消化器内視鏡技師会会報，39，121-123，2007.

S-8 中国地区消化器内視鏡技師研究会における研究発表の傾向と動向

中国地区内視鏡技師会

J A 広島総合病院	○石崎 淳子
岡山労災病院	梶原みゆき
博愛病院	松下 鈴代
宇部興産中央病院	田村真由美
島根県立中央病院	角森 正信

はじめに

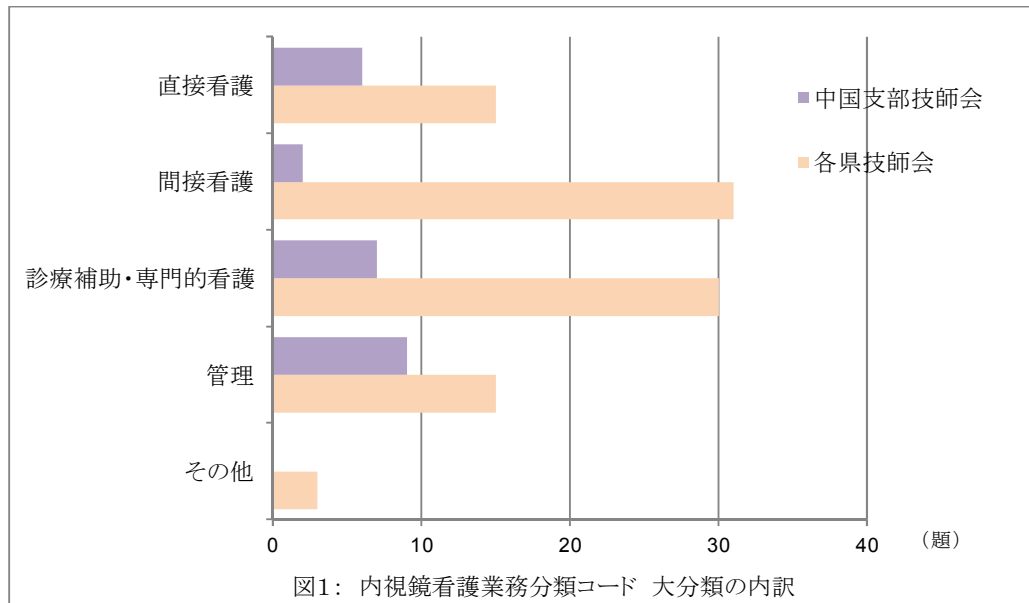
内視鏡従事者は多職種で構成されており、学会や研究会ではそれぞれの特性を生かした研究が発表されている。

中国地区では年1回、中国地区消化器内視鏡技師会主催の研究会が開催され、各県でも年1回研究会が開かれている。今回過去5年間の研究発表の内容から、当地区の傾向と今後の活動について考察した。

方法

2008年から2013年までの中国地区内視鏡技師研究会及び、各県主催の技師研究会での一般演題118題の内容を分類し分析した。

分類は、2008年富山内視鏡看護研究会発表の「日本消化器技師研究会における研究発表の傾向と動向」での内視鏡看護業務分類コード・大分類4項目、中分類26項目を使用した。



結果

大分類の内訳は、中国支部（以下支部と略す）では管理、診療補助・専門的看護、直接看護の順に多かった。各県の研究会では、間接看護と診療補助・専門的看護が多かった。

中分類の内訳は、直接看護では支部、県ともにコミュニケーションと教育・オリエンテーションが多く、被験者の苦痛や不安を軽減するための援助や指導などの内容であった。

間接看護では、支部では内視鏡の記録や継続看護についての研究が1題ずつであった。各県では洗浄・消毒が最も多く、洗浄履歴やスコープの洗浄、ブラシの使用などの内容であったが、どの項目も万遍なく研究されていた。

診療補助・専門的看護では、支部は前処置と非侵襲性の検査介助に集中していた。各県の研究でも前処置が多く、そのなかでも下部内視鏡前処置に関する内容（新規の腸管洗浄液使用経験）が多く、他にカプセル内視鏡の介助など非侵襲性検査介助と、セデーションについても多い内容であった。

管理では、支部、各県ともに研修・指導・研究と勤務関連・業務調整が多かった。研修・指導・研究では、自部署での新人教育、病棟看護師への研修会、周辺施設対象の研修会や勉強会などのないようであった。勤務関連・業務調整では、内視鏡技師、看護師、臨床工学技士の役割分担の取り組みなどが増加している。

考察

内視鏡検査・治療に関する新しい情報に対する研究発表は多い。興味深い情報に関しては、講演やシンポジウムなども積極的におこなわれている。新製品の発売に関する研究に関しては、重複する内容の発表も多く、文献検索の不十分さがうかがえる。また、支部では発表予定数に対して応募数が少ないため査読ができていない。そのことも重複する内容の発表の原因と考えられる。研究会の発表レベルにあるかの判断が出来ていないままの発表もあるのではないかと考える。

中国地区技師会として取り組むべき課題

技師会として今後取り組むべき課題は、支部や各県の利点を生かした研究会を開催することではないかと考える。学会や研究会は学ぶ場所であるとともに情報収集や情報交換の場でもある。より現場に即した身近な研究で意見交換が出来る貴重な場所であればならない。また研究は小さなものから始まり、積み重ねで大きな発見へとつながる。査読を実施し、研究として不十分であった場合にもフォローできるような体制をとって、支部からも内視鏡技師のレベルアップをはかっていきたい。

引用・参考文献

- 1) 安東則子他：日本消化器内視鏡技師研究会における研究発表の傾向と動向,日本消化器内視鏡技師会会報,39,121-123,2007.
- 2) 南裕子編集：看護における研究,P261-266,株式会社日本看護協会出版会,2013.

連絡先：〒738-8503 広島県廿日市市地御前1丁目3-3
TEL 0829-36-3111 FAX 0829-36-5573

S-9 5年間の四国消化器内視鏡技師研究会における研究発表の傾向と動向

四国消化器内視鏡技師会

近森オルソリハビリテーション病院 ○尾崎 貴美
香川労災病院 岡本 澄子
たかさきクリニック胃腸科内科 岡林さよみ

はじめに

四国消化器内視鏡技師会は平成14年(2002年)より、中国四国消化器内視鏡技師会から分離し独立した活動を行っている。毎年1回の研究会を四国4県持ち回りで開催し、毎回数件の発表がされてきた。今回過去5年間の発表を分類しその内容の傾向と動向をまとめたので報告する。

対象と方法

2009年～2013年の四国消化器内視鏡技師会報の掲載のものを、目的・方法・対象者・結果・研究成果にわけサマライズし、高木ら¹⁾の看護業務分類コードに当てはめて動向を分析した。

結果

掲載された発表は36題、内視鏡看護業務分類コード大分類では「直接介助」3題(8.3%)、「間接介助」10題(27.8%)。「診療の補助・専門的看護」17題(47.2%)、「管理」4題(11.1%)、「その他」2題(5.6%)であった。

4つある大分類の中の「直接看介助」では[教育オリエンテーション]の3題のみであった。内容は検査前のオリエンテーション用紙を作成したものや、不安軽減に対してパンフレットでの説明群と未説明群の比較したものではパンフレットを使用したほうが検査時間、姿勢で優位に低い結果でありパンフレットが有効であることが立証されたものや新人教育に医師の個性を組み込んだマニュアルを作成し効果があったなどであった。

「間接介助」[連絡・報告・情報収集]は1題で、ESD術前訪問を行いカンファレンスで共有し看護記録に反映した例や、[記録・観察]5題ではクリニカルパスの作成や電子カルテでの内視鏡看護記録の試み、県技師会での内視鏡記録の現状報告など、[洗浄・消毒]4題では履歴管理、スコープの質保障、洗浄ブラシの追求などであった。

「診療の補助・専門的看護」では、[前処置]が5題あり経鼻内視鏡に関すること、経口腸管洗浄剤での飲みやすさ、味、量などの工夫であった。[薬剤(注射)セデーション]3題ではプロトコール鎮静法の検討やシクリアの有用性の検討、鎮静下内視鏡患者の看護環境の検討などであった。[検査・治療介助(浸襲性)]の9題はもっとも多く、胃婁交換時期延長の試みやPTEGの利点、表在性咽頭腫瘍の内視鏡的切除の報告、ESD補助具発明、ゼオクリップとEZクリップの比較検討、抗血小板服用下での生検の妥当性などであった。

「管理」では[研修・指導・研究]の4題で、内視鏡技師としての医療安全の啓蒙や、超高齢者は胃がんのリスクファクターであることの検証、外来での内視鏡技師が一貫した知識技術の習得するための学習の必要性、などであった。またこの4つの大項目のいずれにも該当しないものを「その他」とし2題あげた。この中には単なるアンケートの報告や、内視鏡にチーム医療として他職種の関わる中での臨床検査技師の役割があった。25の小項目の中に該当しないものが17個あった。

一方、5年間の研究発表を行った施設での発表回数は、1回13施設、2回4施設(8題)、3回3施設(9題)、

6回1施設(6題)であった。

考察

この内視鏡分類コードはそもそも内視鏡介助を実践する看護師の業務量を可視化し各カテゴリーでどれだけの時間が費やされているのかを明らかにするもので、研究発表の内容をこの分類に当てはめるのは少し無理があったかと思うが、小項目に分類されたカテゴリーの中に該当するものは8個であり、最も多かったのは「診療の補助・専門的看護」の17題で、中でも[検査・治療介助(侵襲性)]が9題あるのは、近年の内視鏡処置が高度化専門化してきており、幅広い知識やかなりの技術の熟練が要求されるとともに施行医も増加してきていることから、内視鏡において質が求められる傾向にあると考えられる。そのことに相まって処置具の開発等の発表が新たに加わっていることも最近の傾向であると考えられる。前処置については新しい腸管洗浄剤の開発により以前と違って安全で少ない量で飲みやすく早く検査ができるものの検討など、これも質の時代に入ってきたものと考えられる。また、近年のIT普及により電子カルテ上での工夫や、自ら工夫して作成した看護記録なども目立ったこともうかがえる。最近の内視鏡に従事するものは看護師以外の他職種が関わるチーム医療の中のそれぞれの職種の関わりなど、新しいものが発表されてきているが、これらは看護の中に該当しないものでその他とした。今後はますます多職種が関わることに對しての発表が増加するであろう傾向が示唆された。

まとめ

四国の発表は全体的にはまだ他施設と共有できないオリジナルな報告や各施設での工夫など現場においての切実な内容が多く、このような発表も継続して行っていく必要があり一方、今後は症例数をたくさんとりデータ処理し分析した量的研究や、論理的にまとめた質的研究などの研究プロセスを通過した研究も目指していき研究の質を高めていくことも重要であると痛感し今後の課題である。

引用参考文献

- 1)高木妙子他：内視鏡看護分類コードの作成，日本消化器内視鏡技師会報，No33,89-90
- 2)安藤則子他：日本消化器内視鏡技師研究会における研究の発表と動向

S-10 九州消化器内視鏡技師研究会における研究発表の傾向と動向

九州内規鏡技師会看護委員会
産業医科大学病院 ○岩永 明子
済生会長崎病院 安部 龍一
金子病院 松島 貴博
ハートライフ病院 古波音美登利
九州技師会看護委員 西 洋子

はじめに

九州消化器内規鏡技師会は、内規鏡検査に携わる技師・看護師の技術向上のために年2回研究会を開催している。これまでの研究会での発表は、「前処置、洗浄・消毒・指導」が多く、症例発表や薬剤を除いた安楽の工夫(体位・声かけ)などは少ないのではないかと考え、2009年から5年間の研究発表内容を分類・分析し、傾向と動向をまとめ、これまでとこれからの内視鏡看護研究について考察した。

目的

技師研究会における研究発表内容の傾向と動向をまとめ、これまでとこれからの内視鏡看護研究について分析考察を行う。

方法

期間：2009年～2013年の5年間。

対象：九州消化器内視鏡技師研究会で発表された研究内容。

方法：九州消化器内視鏡技師会会誌に掲載されている発表論旨を熟読し、その内容に応じて内視鏡看護業務分類コード・大分類4項目、中分類26項目に分類し、年順に研究傾向と動向

向を分析した。さらに内視鏡看護に関する研究内容について詳細に分析した。
(1981年～2006年日本消化器内視鏡技師会会報分析と比較)¹⁾

結果

論旨の総数は117題、内規鏡看護業務分類コード大分類での内訳は、直接看護24題(20.5%)、間接看護22題(18.8%)、診療の補助・専門的看護50題(42.7%)、管理21題(17.9%)であった。

研究方法はアンケート、口頭による聞き取り調査が83題(70.9%)と多く、次に実験調査が21題(17.9%)であり症例研究は5題(4.3%)であった。中分類の内訳は直接看護では、「教育・オリエンテーション」が14題と多く、次に「観察・測定」が4題であった。「教育・オリエンテーション」では、新人・スタッフ指導、検査のオリエンテーションにパンフレットやビデオなどの使用が多くみられた。また「観察・測定」では、セデーション使用後の覚醒状態の観察などがみられた。

間接看護では、「設備・機器の保守・点検」が7題あり、次に「洗浄・消毒」と「連絡・報告・情報収集」の順に多くみられた。

「設備・機器の保守・点検」では、スコープに対する管理が多く漏水の事前チェックにより修理代を削減する研究や使用頻度と故障発生との関連性についての研究がみられた。

「洗浄・消毒」では、予備洗浄マニュアルを導入し洗浄技術の統一やフタラール製品の使用廃止などがあった。

「連絡・報告・情報収集」では、ESDを受ける患者の看護に関する問題点の共有やクリニカルパスの有効活用などがみられた。

診療の補助・専門的看護では、「前処置」が27題と多く、次に「検査・治療介助(侵襲性)」が10題であった。

「前処置」では、下部内視鏡や経鼻内規鏡に関する内容が多く、新規の腸洗浄剤の使用や経鼻内視鏡検査の効果的な前処置の研究が多くみられた。

「検査・治療介助(侵襲性)」は大腸内視鏡検査時炭酸ガスと空気送気による検査後の腹部症状(苦痛の緩和)に関する内容が多くみられた。

管理では、「勤務関連・業務調整」が7題、次に「感染管理」が6題の順であった。「勤務関連・業務調整」では、待ち時間や内規鏡業務改善の取り組みがみられた。「感染管理」については、履歴管理に関するものが多く紙運用からPCファイリングへの移行時の管理・指導が多くみられた。

考察

間接看護に関しては、従来は洗浄・消毒の研究が多くみられたが、ガイドラインの確立により少なくなった。消毒をふまえた履歴管理や内規鏡医療の発展に伴い業務改善など管理面の研究が増えている傾向である。

診療の補助・専門的看護が全体の42.7%を占めているが従来と変化はなかった。従来は上部内視鏡の咽頭麻酔の研究が多くみられたが、今回はセルロース残量に関する内容や自宅移行による前処置方法や経鼻内視鏡の普及に伴い患者のニーズも多様化となり、麻酔方法の工夫も増えていた。また、炭酸ガスを導入する施設が多くなり侵襲性に関する研究も多くみられた。

直接看護に関しては、新人・スタッフの指導や検査前のオリエンテーションが多くみられたが、検査後のオリエンテーションも今後必要ではないかと考える。また、症例研究や薬剤を除いた安楽の工夫に関する研究は少なかった。従来は「タッチ、マッサージ、声かけによる研究」が多くみられているが今回は1題もなかった。

発表論旨を熟読するに当たり、倫理的配慮や対象の人数の記載がない場合があり査読の重要性が今後の課題であると考えられる。また、研究成果の検討をする論旨が少ないことも示唆される。

結語

九州の技師取得者の中で大半は看護師が占めている。医療が高度化になるにつれ看護の質の教育が求められる。教育に関しては、内視鏡看護におけるクリニカルラダーを用いることによりスタッフ全員の統一した教育が図れ、看護の高度化につながるのではないだろうか。

不安を持って検査を受けられる患者を和らげるため、「心」はだれにも見えないけれど「こころづかい」は見える。「思い」は見えないけれど「思いやり」はだれにでも見える²⁾。

看護サイドに立った専門性の高い看護を提供するためにも今後の課題として、研究が看護の視点での発表を望まれる。

参考・引用文献

- 1) 富山内視鏡看護研究会(日本消化器技師研究会における研究発表の傾向と動向)
- 2) 宮渾 章二: 行為の意味・青春前期のきみたちに
- 3) 九州消化器内規鏡技師研究会会誌(2009～2013)

S-11 日本消化器内視鏡技師学会（旧技師研究会）における研究発表の傾向と動向

市立砺波総合病院 ○安東 則子
真生会富山病院 梅田加洋子
富山赤十字病院 大橋 達子
済生会富山病院 高木 妙子

はじめに

日本消化器内視鏡技師会における技師研究会は、1988年（昭和63年）内視鏡パラメディカル研究会から改名され、年2回の開催を実施され現在に至っている。技師研究会は昨年2006年第57回を持って終了し、今回より技師学会と名前が変わった。内容を分類・分析してきた。今回は技師研究会における研究発表内容の傾向と動向をまとめ、これまでとこれからの内視鏡技師研究について考察した。

方法

対象：2008年から2012年の日本消化器内視鏡技師会報の一般演題発表論旨。

方法：技師会報に掲載されている発表論旨を熟読し、その内容に応じて内視鏡業務分類コード・大分類4項目、中分類26項目に分類し、年順に研究傾向と動向を分析した。さらに内視鏡に関する研究内容について詳細に分析した。

結果・考察

論旨の総数は425題、内視鏡業務分類コード中分類26項目の内訳は、①洗浄・消毒75件、②前処置66件、③非侵襲性検査介助52件、④侵襲性検査介助46件の順に多い結果だった。全体を通して研究の方法はアンケート調査、内視鏡検査記録・看護記録からの実態調査、洗浄に関する履歴管理・培養検査、症例報告などが多く見られた。発表者の職種に関しては記載内容からは判断できない論旨もあった。演題から論旨内容を把握しにくい傾向があり、施設紹介・製品紹介に相当する内容も見られた。内視鏡の技術開発・新規薬剤開発・発展に伴い発表内容も変化していく傾向も見られた。また、同様の内容の研究発表も多く見られ、先行研究成果の検討をする論旨が少ないことも示唆された。研究の目的は「新しい事実や解釈の発見である」と言われる。今後は技師研究の質の担保が望まれる。

結語

内視鏡技師会の研究論旨として概観した結果、年代と共に研究内容は変化してきたが、施設ごとの工夫や業務改善の内容が多く、現場に即した発表内容であることがわかった。今後はエビデンスレベルの高い研究の構築を目指した研究活動、成果の蓄積と活用が望まれる。

連絡先：〒939-1395 富山県砺波市新富町1-61

市立砺波総合病院 看護部

安東則子

TEL：0763-32-3320

FAX：0763-33-1487

e-mail：andou.noriko@topaz.plala.or.jp